

名前にしておきました。でも 1,000 円貰えるよりは死なない方がいいわね。

昭和18年入学と共に戦局は苛烈さを増し、19年春休みには早くも藤倉電線に動員され、8月から造兵廠で工員さんと共に働いたが、20年5月に寮が焼けたので、6月末から群馬県の農村に行き生れてはじめての農作業に明け暮れる中に終戦を迎えたのであった。

敗戦の混乱からようやく立ち直りかけた昭和22年3月私共は社会に出た。それから30年、31人の友の中早くも5人が欠けた。この年代は男性にとっても戦没者の多い年代であるが、女性にも戦争が暗い影を落していることがわかる。また26名中6人は未婚である。

長寿寺の精進料理の席には更に3人が加わって私共は一そうにぎやかに歓談し、歌い、笑い、写真を撮りあって別れた。生死を領ち会った友なればこそ友情の絆は固く、年1回のこの楽しみが、明日からの生活を支える活力となるのをおぼえるのである。

## 駅前旅館のお土産

木内信蔵

井伏鱒二の軽妙な筆に較ぶべくもないが、地理の人々がしばしば御厄介になる駅前旅館の思出を記そう。

言うまでもなく、その位置は鉄道の駅前。大きい町では宿屋街を作る。夜おそく着いて早立ちに便利である。比較的小型で安い。市内外のバスに乗り、買物・食事に便利である。少々うるさい難があるが気取らぬ所がよい。しかし戦争中のこと、虫を一匹土産にもらって、しらみと言うものに初対面したのはある県庁所在地の駅前旅館であった。

1976年8月、国際地理学会議を終えて、モスクワを立ち、コペンハーゲン、フランクフルトを経て、ヴュルツブルグに到着した。メイン川を見おろすマリエンベルク要塞や荘麗な王宮と庭園をもつ大学都市である。重いスーツケースを引きずって駅前に待つタクシーに乗り、「Eホテル・ピッテ」と告げた所、運転手は笑い出して「下りなさい、広場の向うです」と言う。しかし、くたびれてお尻の重くなった私は、「町をひと廻りしてくれ」と頼んで、もとの広場に下り立った。

部屋は狭いが清潔で、冷蔵庫にはビール、ブドウ酒類が詰められ、窓からは花に飾られた噴水の駅前広場が見渡せる。駅の後は傾斜してブドウ園となり、10万余の人口を持つ駅前としてはのびやかである。二泊目には工員らしい男女五十人ほどの団体がバスで到着し、狭い食堂はおしゃべりで賑わったが、夜10時を過ぎると物音一つも立てず、日本の観光客とは違うところをみせた。

1962年7月のオランダ訪問はすべてユトレヒト駅前のホテルから立った。建物が古く地盤がわるく、夜半に通過する貨車やトラックの振動に悩まされたが、ここは、アムステルダム・ロッテルダム・ハーグと環状をなすリング都市の核に当たり、国鉄電車は国内各地はもとより、ドイツ・ベルギーへの旅行にも便利であった。ユトレヒト大学の経済地理学ドゥヴォーイス教授のお世話になり、城壁跡の緑地にあるカフェで旅の疲れを慰やした。夕刻には先生のお宅に招かれて奥さんの手料理を頂い

た。玄関の土間に4、5台の自転車がおいてあるのが印象的であった。

ライン・マース河口の洪水防止を計画するデルタ・プランは、デルフトの水理実験所を見学した後、ランチに乗って現場を訪れた。ロッテルダム都市再開発を調べ、ユーロ・ポートの巨大な石油タンク群をみて、何れも小さな国の壮大な事業をみた。古いホルダーから新しいホルダーへと排水工事、植林、農場、中心地等の多方面に至って実験を積重ねて計画されているのに心を打たれた。

一日はハーグにある社会経済研究所のタイセイ教授を訪れた。教授は国連の阪神大都市圏調査団の一人として来日し、愛用のヴァイオリンを旅先で奏でる名手でもある。旧王宮の奥深い研究室の両側は、世界各国から集められた地域開発の文献で埋まっていた。開発途上国から多くの研究生が集まり、その文献が役立っていると言う。計画の進行はオーケストラのように調和的でなければならぬであろう。

駅前旅館（ホテル）は叙上のような土産を恵んでくれた。この他、国内国外に亘る珍談・佳談は後日の楽しみにしよう。

## 昭和51年の巡検

籠瀬良明

印象に残った巡検や小旅行を拾ってみたい。

2月1日 霞ヶ浦・北浦 金子晶子・重松滯子、院生荒川裕子・松崎正子の4名。後日執筆した記事「地理7月号」では、その折金子さん撮影のバイブラインの写真を借用した。同じく金子さんの手をわずらわした1枚には、レンタカーを往復運転してくれた日大の院生たちの顔もうつっている。その写真をさがしていたら、3月12日日本郷江知勝での記念写真も見つかった。永い間、もっと正確に言えば満40年間お世話になったお茶の水地理、現在のオールメンバーがうつっている写真なので、大切に保存してあったものである。私についても65才を記録する大切な写真になった。

日記を調べたら、3月末までに7回も公私の巡検を行っている。冬のほうか地面も空も乾いていて好きなのである。でも時には天気はずれる。院生たちとでかけた霞ヶ浦は小雨だった。女性を4人もつれ出したのが、いけなかったらしい。

5月4日は日本地理学会の皆さんを伴ない、帝京大学の柴田教授に協力して埼玉北部へ巡検。その準備の巡検を4月に何回も行ったのが思い出される。学生や院生と違った人たちの案内には、また別の苦勞があるものと痛感した。学生の巡検は8月と10月、武蔵野台地と前橋付近で行った。また暮の1日、沢田清教授指導の院生の巡検を、都内でやったことがある。早稲田大学前集合だったから、そこらを少し歩くのだろうと、うっかりついて行ったら、3時間後には神田須田町まで歩かされていた。ジクザクコースなので9キロもあった。そのコースの中に、茗荷谷の一端が入っていた。私は沢田さんのおかげで、40年前を回想し得た。というのは、私は当時そのキリンスタン坂近くのアパートに住み、歩いて10分もかからない近い職場を感謝していたからである。その回想に引かれて、数日後再度茗荷谷かいわいを歩いてみた。住む人、家の形は一変していても、昔日の記憶はじゆうぶ